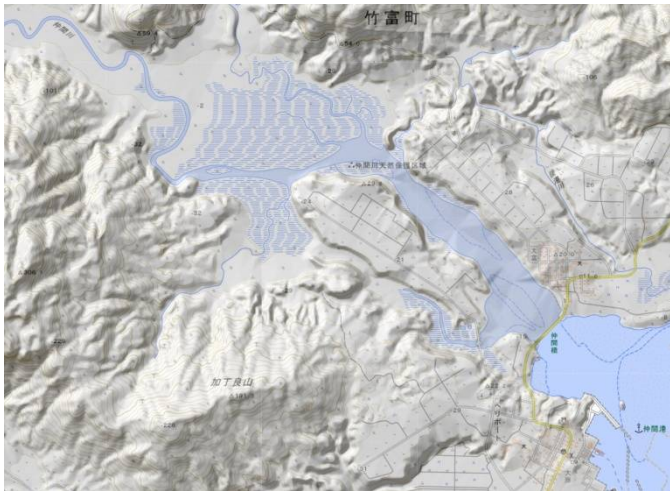


【2日目/5月23日(つづき)】

西表島(いりおもてじま)は、八重山列島では最大、沖縄県でも沖縄本島に次ぐ面積、弧状列島(日本列島)でも第12位という結構大きな島です。しかし、そのほとんどが原生林(亜熱帯ジャングル)で覆われていて、島を一周できる道路も未開通です。



(国土地理院)

西表島の観光の目玉は、「マングローブの川のクルーズ」です。中でも「西表島一の大河」の「仲間川(なかがわ)」のクルーズ船は人気観光の一つで、ほとんどの観光客はこれに乗船するようです。大河といっても全長8km弱の川で、しかも河口付近は広大な湿地帯になっています。大潮の満潮時には海水が数kmも遡上し、下流域の生態系は淡水系ではなく海水系の色が濃いと言えます。



私はこのクルーズ船(というより屋根付きのボート)でも、凶々しく最前列の「一等座席」を陣取りました。

たぶんほかの乗客からは「このおっさん、バスでも船でも一番前じゃん」と思われていたに違いありません。船は、恐らく私の所持している船舶免許(20t/近海域・静水域)でも操縦可能なサイズです。船長が突然倒れたら、操縦を代わろうと思っていましたが、幸いその必要はなかったです。

船は全席オープンデッキ(固定された窓がない)ですが、雨が激しい時は、ビニール製の雨除けを下す構造になっています。幸いこの日も雨は降っていませんでした。



船はしばらく高速で突っ走りますが、しばらく遡上すると、急に速力を落とします。何でも西表島の陸水(川)の運行には、生態系保護のために非常に厳しい規則があるらしく、船舶の制限速度も厳格な決まりがある・・・と船長の説明でした。

船は「マングローブの森」の中を遡上していきます。「マングローブ」というのは、主に汽水域(海水と淡水が混ざり合う河口付近)に群落をつくる木本(樹木)の総称です。上の写真は「ヤエヤマヒルギ」といって、根もとがタコの脚のように枝分かれした「支柱根」が発達していることで見分けられます。



こちらは「オヒルギ」とう種類のマングローブです。支柱根から葉のある枝まで、少し幹が直立しているのが特徴です。



マングローブの種類によっては、水面から「筍根(じゅんこん)」と呼ばれる突起を出しているものも見られます。これは「呼吸根」の一種で、その名の通りの役割をしているのでしょう。



マングローブの仲間は、水底に根を張っているのもので、その繁殖方法(種子の拡散方法)も独特です。たとえばこれは「メヒルギの種子」ですが、長細い剣のような形状で、これを水中や干潟の泥に落として「突き刺さる」ことで種子を拡散します。



そんな方法で本当に発芽して成長するのだろうかと思っていましたが、ちゃんとエビデンス(「エビの一種」ではなく「証拠」という意味)がありました。実はほとんどのマングローブ類の種子は、せつかく落ちても台風の大水で流下してしまうのだそうです。しかしここ2年ほど西表島は大きな台風の被害がなく、

マングローブ類の種子がうまく定着・発芽している例が多いのだそうです。1本もらって、どこかの田んぼに植えてみたいと、強く思いませんでした。



川の上流でも、川幅が広い場所があります。速度はゆるいので、船長が舳先に立って写真を撮ってもよろしい、と許可してくれます。素晴らしいサービスですね。しかし「救命胴衣」の着用は義務付けられていないので、落ちたらマングローブの一種になる運命です。



岸には「アダンの実」がたくさん見られました。船長の操船技術はすばらしく、手に届きそうな場所まで近寄って、ほとんどゆき足0にしてくれます。



水温と気温の温度差からでしょうか、川面に霧がちこめて幻想的な風景になっていました。船長さんの話では、このあたりでこういう現象は珍しいということでした。